
古都タクシー異聞

桂まゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

古都タクシー異聞

【コード】

N9515F

【作者名】

桂まゆ

【あらすじ】

日本屈指の観光地として有名なある街。そこに住んでいる女の子のタクシーにまつわるショートショートです。

「乗車拒否された？ 嘘ばかり」

遅れて来た菜織を私は呆れたように見上げる。

始発に乗るから決して遅れるなどあんなに口をすっぱくして約束したのに、菜織は約束よりも十分も遅れて到着した。おかげで、改札からホームまでダッシュでエスカレーターを駆け上がる羽目に陥ったのだ。（注：危険ですので真似をしてはいけません）

何とか予定電車に間に合い、目的地まで一時間。ようやくと、遅れた理由を問いただす余裕が出来ただ。

菜織は不服そうに少し唇を尖らせる。

「本当やって。約束に遅れそうだったから祐ちゃんちから直接タクシー拾おうとしたら、いきなりドア締められて、それはそれはすごいスピードで走り去って行ったんよ」

「祐ちゃん、どこに住んでるって？」

「深泥池」

なるほど。

確かにあのあたりは少し気味が悪い。というか、心霊スポットとして有名な場所だ。早朝に女の子が一人で立っていたら乗車拒否もあるかもしれない。

「一番の敗因は、眠気覚ましにシャワー借りたんやけど、髪が完全に乾いてなかった事かなあ」

そのタクシー運転手に同情したい。きっと今頃どこかのお客さんに「さつきあのへんで幽霊見ましたんや」とかしゃべってるんじゃないだろうか。

「そういう多恵もタクシーの運ちゃん驚かした事あったんと違ったっけ？」

「うん。実は、ある」

ある電話に起こされ、夜中の三時に家を飛び出した。

タクシー会社の電話番号を捜せないほど、私は気が動転していたのだ。

『もう、可哀想やから薬を入れましようって言われたんや』
電話口で、母親はそう語った。

入院中の父親の容態が悪化したのだ。

眠ってしまえば、きつとそのまま。

母親の声は落ち着いていた。覚悟を決めたせいだろう。

だから、早く駆けつけてあげたくて。私は家を飛び出したのだ。

住宅街に、夜中の三時にタクシーが走っているわけがない。でも、その先の広い通りまで出れば拾えるだろうと足を速める。

と、何故か前から空車のタクシーが来た。誰かを送った帰りなら、方向が逆なのに。おかしいなと思いつながら手を挙げて、乗り込む。

「どちらまで？」

運ちゃんが少し緊張した声で聞いた。

「病院まで」

驚いた顔で振り返った運ちゃんは私をしげしげと見つめ、やがて聞いた。

「かなり危ないんですか？」

私が頷いたので、タクシーは病院に急ぐ。

夜中の事なので病院にはすぐに到着して、私は父親が安らかに眠りにつく様子を見る事ができた。

今もあのタクシーがなんであんな時間にあんな場所を走っていたのかは解らないし、運ちゃんが驚いた顔をしていたのかも解らない。「でも、あれは幽霊と思われたわけじゃないと思う。普通に若い女がそんな時間に歩いてるからびっくりしたんと違うかな」

「いや、あんたの家があるところも夜は相当に気味悪いって」

普通の閑静な住宅街だと私は思っているのだが。

私たちが住む街は、古い。

だから、住んでる者には解らない独特の何かがあると言われている

る。

古いと言えば、日本全国どこにでも古い街はあるんじゃないかと思うのだが、日本全国に住んだ事はないので断言はできない。

私はものすごく恐がりなので、心霊スポットなどには絶対に足を踏み入れない。それでも、お盆に先祖の霊を迎えに行く折りなどは、確かにこの世とあの世が混ざっているような錯覚をしてしまう。多分、あの猛烈に暑い道を延々と歩いている間に頭がぼーっとしてくるせいなのだろう。

「多恵って、霊の存在を認めてるのか認めてへんのかよくわからんわ」

菜織がそう言って笑う。

そんなもの、認めてるけど自分の周りに居て欲しくないと思ってるだけだ。

住んでいる者ですら、たまにこの世とあの世が混ざっていると錯覚する、街。余所から来たタクシー運転手には、それはもっと顕著なのかも知れない。

帰りは、少し遅くなった。

明日は仕事だ。

菜織と軽く夕食を済ませて別れ、駅からタクシーを拾う。

家の前につけてもらい、扉を開けてくれた運ちゃんが訝しげに私に告げる。

「あれ？ お客さんお連れの方は？」

勘弁してください。お願いします。

(後書き)

とてもありがちな話ですね。

はい、全部実話です。ちなみに「幽霊と間違えられた女の子」には後日談があり、彼女が泊まった家の子が自宅に帰ろうとタクシーを拾うと、その運ちゃんに「実はこの間あそこで幽霊乗せかけたんですよ」と言われたそうです(笑)。罪作りですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9515f/>

古都タクシー異聞

2011年1月9日02時24分発行